

採集から構築へ

差別問題のライフヒストリー研究、エスノメソドロジーの軌跡

好井 裕明（広島国際学院大学）

聞き取り調査、差別、エスノメソドロジー。本シンポの企画文書で私に与えられたキーワードだ。この言葉を並べ替えて、今回私が何を報告したいのかを述べてみる。差別問題の社会学研究において聞き取り調査はこれまで何をどのように生み出したのか。調査がすすめられていくなかで、エスノメソドロジーという考え方がどのように研究自体に影響を与えるようになったのか。そして今後の聞き取り調査の課題としてどのようなことが呈示できるのか。ただ差別全般について語ることははじめから放棄しておきたい。それと高度に抽象的な理論言説を机上でこねくりまわすことも苦手なので、これも放棄する。できるだけ私自身が実際に関わってきた調査研究やそこから得た経験、実感などをもとにして報告したい。

部落差別という問題を中心にすえる。被差別の当事者から生活史などを聞き取る調査がこれまでどのような“物語”を創造してきたのか。「人間変革・解放の物語」「被差別文化を再興し評価する物語」「暮らしの物語」「文化それ自体を見ようとする物語」という物語創造の変遷を述べたい。

また、聞き取るという営みを調査者自体がどう認識していたのか。その認識の変容を手がかりとして、「採集する営み」から「構築する営み」へ、「仮説 検証、事実収集」の聞き取りから「データ対話型」そして「相互行為の構築・解読」の聞き取りへという変遷を述べたい。そのうえで差別問題における聞き取り調査の今後の課題を、解読すべき新たな対象・現実、解読結果が担保すべき“信頼”のありか、といった点から呈示したい。

本報告が、単なる部落差別問題をめぐる聞き取りの調査史断片にとどまらず、今後調査する者が「いま・ここ」の時点から、自らの調査実践を反芻し、さらなる興味深い聞き取り調査実践を模索し志向するための一つの手がかりとなれば、と思う。